

# 大学での勉強法を教えます

— 初年次教育としての「論文の読み方・書き方」—

日本の大学では、2年生、3年生、4年生と学年が上がるにつれて、勉強への意欲が低くなってしまおうという皮肉な現実があります。大学で最も向学心にあふれているのは、シラバスを片手に、キャンパスを歩いている1年生です。本学では、やる気あふれる1年生の期待に応えるために、初年次教育としての「論文の読み方・書き方」という授業が開講されています。

学期末になると1年生から、次のような声をよく聞きます。「専門の講義で『非正規雇用』について4000字程度でレポートを書けという課題が出たけれど、参考文献の集め方が分からない」「大学でレポートを書く時は、脚注と参考文献を付けろと言われてたけれど、脚注の書き方も参考文献の書き方も分からない

し、『ワード』の使い方も分からない」。これらの声は、従来の大学であれば、自分で身に付けておくことが当然と思われていました。しかし、1年生対象の「論文の読み方・書き方」の授業では、大学で勉強していく上で必要なスタディ・スキルズを、初歩から丁寧に説明し、高校から大学へのスムーズな橋渡しを目指しています。「やる気はあるけれど、勉強のしかたがよく分からない」という1年生のみなさん、ぜひ「論文の読み方・書き方」を受講してください。

■論文の読み方・書き方b1・b2・  
c1・c2

児玉 英明  
(こだま ひであき)



高崎経済大学を卒業後、京都大学大学院人間・環境学研究所へ進学しました。2005年度より「論文の読み方・書き方」を担当しています。現在は、大学全入化をふまえた初年次教育のカリキュラム研究に励んでいます。

大学の先生は、高校の先生と比べると、授業が上手いとはお世辞にも言えません。高校の先生は、大切なところを、赤や黄色のチョークで板書してくれました。高校の授業では、先生が書いた板書をそのまま書き写せば、それだけで立派なノートができました。しかし、残念なことに、大学では高校のように、丁寧に板書をする先生は少数です。だから、「先生が黒板に書いたことしかノートに書き写さない」という姿勢では、いつまでたってもノートがとれるようになりません。もう一度、言います。「先生が黒板に書いたことしかノートに書き写さない」という姿勢は、大学では通用しません！大学では、期末テストの際に、ノートを持ち込んでも構わないという科目が多々あります。普段の授業では、期末テストに備えて、先生の話をもメモをとりながら聴いてください。「ノートテイキング」は、初年次教育で身に付けて欲しい、最も大切なスタディ・スキルズの一つです。